

震災についてこどもと対話する〈こどもの哲学〉の可能性—地域、学年を越え拡張する学びに向けて—

高橋 綾（大阪大学 コミュニケーションデザイン・センター 招聘教員）

■ 研究の目的

本研究では、東日本大震災について、被災地のこどもたちと対話し、そこで話し合われたことや、彼らが震災の経験を通じて考えたいことを他地域のこどもたちにも伝え、震災後の生活や社会についてこどもたちと協働して考えていく哲学対話のリレーを計画・実施し、その手法と成果を検証することを目的とした。

■ 研究計画立案の背景、仮説

我々はこれまで、世界各地で行われている対話型の教育実践〈こどもの哲学 philosophy for children〉について調査、研究を進めてきた。これは大人（教師）が知識を教えるのではなく、進行役のサポートのもと、こどもたち自身が、感じ、考えていることを発言し、他の参加者たちに共有される「問い」を作り、互いに考えを聴き合い、深めていく哲学対話の実践である。被災地の教育現場では、こどもたちの心のケアや防災教育、原発についてのディベートなどが行われているが、我々はこうした従来の学校教育の方法とは別のしかたで、こどもたちが、同世代のこどもたちとともに震災に向かい合い、ともに考えることができるのではないかと、という仮説を持つに至った。また〈こどもの哲学〉をベースにしつつ、映像記録を媒介して、震災について考える対話や思考を、被災地だけではなく、被災地外の同世代のこどもたちに広げていくことが可能かを検証することを試みた。

■ 研究内容、手法

- (1) **震災をめぐるこどもたちとの対話の計画と実践、対話の場づくりや手法についての研究**：実際の対話については、〈こどもの哲学〉の手法を用い、リラックスした雰囲気のなかで、こどもたちが震災後に「考えたこと」「自分に起こった変化、気づき」について語りだせる場所をつくることを重要視する。この場づくりについては、ハワイ大学で実施されている〈こどもの哲学〉の Intellectual Safety の理念、概念を応用する。
- (2) **対話の記録、編集に関する実践と研究**：被災地のこどもたちが話したこと、考えたいことを被災地外に住むこどもたちと共有するための媒介物として対話の「映像」に着目し、対話の撮影法や、編集法、映像の見せ方、映像という媒体の特質についても検討を行う。
- (3) **対話の意義の検討、対話のリレーすることで得られる学びについての理論的考察**：対話の記録や参加者の感想を分析することによって、対話やそのリレーのなかで実際に何が起きているかということの検討を行う。

■ 結果・成果

- (1) **対話リレーの実施**：被災地域の公共施設、生涯教育活動関係者、教育関係者の協力のもと、2012年度に、東北で4回、被災地外で5回の対話を行った。
- (2) **こどもたちの対話や思考の軌跡を記録し、発言集、映像という形で公開する**：上記対話映像と文字記録を「思考を媒介する」という編集方針のもとで編集し、映像記録と発言集を作成した。
- (3) **対話による協働学習が、こどもたちの自律的に考える力を育成することを実証する**：学会、研究会で発表し、日本の教育関係者やハワイ大学で〈こどもの哲学〉を推進する研究者と今回の対話リレーの成果を分析し、検討を重ねた。対話リレーの記録の検討によって、被災地のこどもたちや被災地外の同世代の人との間で、「死について」「震災の当事者とは誰か」「ふつう（の生活）とは」というような普遍的な問いが共有され、思考がリレーされていることがわかった。また Intellectual Safety に配慮した場づくりによって、単に対話のテーマが共有されただけではなく、対話相手や自分の生について認め、受け入れるということも生じつつあった。このことから、対話による協働の学びにおいては、震災の“当事者”／“非当事者”という分断を超え、問いを共有し考えること、それによる相互の生の承認やエンパワーメントが得られるという可能性が見いだされた。

■ 今後の課題、展望

被災地の学校現場や中高生だけでなく小学生ともこうした対話を行うことが今後の課題である。本年度の対話記録は各地の教育関係者や〈こどもの哲学〉の推進者と共有、今後の対話のための教材として活用される。長期的な視野で震災についての対話を今後も行っていきたい。